

2024. 3. 1

現代俳句千葉

152号

巻頭エッセイ

俳句は奇跡

幹事 川上典子



五年前まで、小中学生に英語を教えることを仕事としていました。三十五年間くらいずっと生徒たちと一緒に、高校受験の英語の勉強を続けていたことになりました。英語文法にはいくらか明るいのですが、英会話を自由自在に話すには、まだまだ学ぶことばかりです。

中学一年生の最初の英語の授業で、先生から「英語は音楽です」と言われました。日本語の様に平板でなく、メロディーがあるということです。確かに、ニュースを例にとると、日本語のニュースは淡々と読まれますが、英語をはじめ外国語のニュースは、抑揚も大きく、イントネーションもはつきりしています。言わばメロディーです。しかし、俳句を始めて日本語について考えるようになった今、日本人の穏やかさは、日本語の穏やかさに通じるものがあるのではと思います。これはあくまで私見ですが、どちらが良い悪いではなく、言葉の語気の強

目次

俳句は奇跡 川上典子	1
諸家近詠	2～5
会員・会友の近況	2～3
私の感銘句	6～7
津田沼研究句会報告	8
青葉研究句会報告	8
柏研究句会報告	8
君津研究句会報告	8
強化部だより 初心者講座	9
図書紹介・掲示板	10

い国の方々は、押しなべて民族性も強いのではないかと感じています。そして、日本人の穏やかさから、深い詩情が込められた、味わい深い季語が生まれたのだと、私なりに推察しています。漢字が表意文字であることも、日本語の豊かさに繋がっていると思います。例えば、春の雨を表す言葉も、春雨・春時雨・小糠雨・桜雨・催花雨・養花雨等等など。その一つ一つの季語に漢字の持つている意味が加えられていて、更に趣が深まります。分からない言葉を辞書や歳時記やパソコンで調べて、一つ知識が増えると、なにか得をした気持ちになります。何歳になっても新しい知識が生まれるのはとても楽しいことです。俳句から、歳時記から、私はこの楽しさをたくさん貰っています。十七音で情景も背景も心情までも表現でき得る、日本の素晴らしい文学である俳句に巡り合えたことは、私にとっての奇跡であり、幸せであり、恵みです。

英語にはできぬ日本語花疲れ

典子

諸家近詠

秋尾 敏

粉雪やSUVの鼻っ面
仁右衛門島立春本当はギターリスト
春の雪一台くらい何とかなる
だれも年寄るみんな年寄る雪残る

小野 功

民法に違反してゐる帰り花
初日の出ぬつと現わる籠の神
筋肉の限界知らず寒つばき
冬の蝶南無阿弥佗佛合掌中

岡田美美子

川岸の迷路のような夏料理
木守柿頑固な父の色を継ぐ
冬晴れやテレビに孫の晴れ姿
女子会に大臣が来るクリスマス

北野 耕兵

酒蔵にしがみつきたる枯柏
喜寿仲間雄心勃勃雪まろげ
老い二人しやしやしやキキと冬レタス
老群やぼろ市めざす明日無き軀

池田 博臣

ヴィーナスの幻肢シャインマスカット
桃吹いてシルクロードの近づきぬ
片道の旅となるやも枇杷うるる
この星の青さいつまで桜散る

國分 三徳

種袋振れば未来の音がする
空蟬や指先はまだ女です
かなぶんを逮捕免停処分とす
菊香るあのお転婆の見合かな

大見 充子

炎天はすなわち鬼の居るところ
みんみんの「ん」の字鳴かぬ遊行かな
人の世へ散るには惜しき夕紅葉
耳鳴りや海底に鯨ねむらせて

小川トシ子

春秋の出口思えりあおい海
水無月の息災の菓子二つ買う
躓きて大きな空の九月かな
冬瓜の尻なでて切るひとりの夜

飯島 昭子

群れとんぼ母追ふやうに風を追ふ
新涼や乳歯二本の離乳食
山紅葉胸にあたたため汽車に乗る
古日記悲しきことは一行に

前田 孝子

手のひらに木の実の微熱夕日落つ
小春日や半熟卵のごとく居る
鎮痛剤効かぬ極月戦火なお
目隠して探る昭和や福笑い

伊与田すみ

逃げ水へ手足の長い親子かな
手榴弾クーラー効いた展示室
だし巻き卵くるりと返す衣更え
気の強さ変わらずに芋頭ごろごろ

渡部 健

名月に潰されさうな空き家かな
過疎高齢バス廃止なり冬ひばり
歳末の大売出しや町閑か
暖房やスマホ握る手うとうとす

《会員・会友の近況》

- ・最近、五十肩に。九十歳を超えても五十肩と言うそうです。(國分 三徳)
- ・足元が覚束なくなり、吟行にはなかなか参加出来なくなり残念です。(大見 充子)
- ・三年前、突発性難聴で左耳が聞こえなくなり、今も耳鳴りです。なぜか作句をしている時は耳鳴りが治まります。もう少し俳句を続けてみようかな。(小川トシ子)
- ・後期高齢者という言葉がとても嫌いでしたが、体のあちこちが痛み、なんか納得しているところ。(飯島 昭子)
- ・人間の幸せの根本は日常生活の中にあり、世界は皆の幸せを感じる気持ちに支えられて動いているのだと思う」とさくらももこさん。同感です。(遠藤 寛子)
- ・どんと焼きの火を見ていたら、心の痛みが急に大きくなりました。大変なご時世になりましたが、俳句を続けていて本当によかったと思います。(渡辺 澄)
- ・去年、息子が仔猫を貰ってきた。麦秋の頃きたので、名前は麦。キジ猫の女の子。冷蔵庫の上のスフィンクスのように座るのが好きだ。自分がこんなに猫好きだったとは。この猫を長生きの励みとしたい。(秋谷 菊野)
- ・最高齢に達しますと中々感動の良い句は出来ませんが、後日蘇った出来事を日記のように俳句にしてあります。(村田 満枝)
- ・庭のうつぎの木に輪切りのみかんを付け、目白と話すのが日課です。(泉 志眞子)
- ・インターネット句会『金蘭の会』も四年目に。ブログに日記がわりの俳句を記しています。(金 蘭)
- ・齢八十。年月の速さを感じます。江戸川土手から見える富士や筑波。散歩は自然の移ろ

川上 典子

来し方をほぐし毛糸を編み直す
 転んでも笑って立つ子チューリップ
 あぶくがひとつ赤い金魚の嘘ひとつ
 湧き水甘し八月の歯が疼く

市川ふみを

砂浜は夏真つ盛りあつちつち
 天高し飯は食つたか良く寝たか
 寒風に耐へて老いゆく瘦せ我慢
 うららかや巨大な尻を誇る土器

遠藤 寛子

ガシャポンの迷宮に入る夏休み
 チェロの音増幅させる霹靂神
 とりあえずもがくことから黄金虫
 楽団は加速していくつくつくし

渡辺 澄

手花火の使いきれない一生涯
 二人づれとは永遠の春景色
 噴水や午後はうしろが見たくなる
 思いだすたび新しい雪降り

秋谷 菊野

コスモスの静止三秒癌告知
 ざらりと猫の舌木枯らし一号
 白菜や母の高さで塩を振る
 おでん鍋くつくつ丸くなる言葉

村田 満枝

保育児の明日へ手を振る冬夕焼
 長縄を皆んなで飛んで春の雲
 春の日や鳩呼び入れて精米所
 握力の日ごとゆるびて柴木蓮

浦野 五郎

背信をポインセチアは見えてをりぬ
 数へ日や最後の指を重く折る
 ひとすぢに年惜みつつ手紙焚く
 漆黒を漂ふ地球寝正月

上杉 良身

枯木立すかし生家の在り所
 土産置き高速道路餅積んで
 旅先の肴は干した鮭と酒
 南天や三千五百歩無事日課

小野富美子

測量の声の昂り冬に入る
 乱丁の少女期ポインセチア真つ赤
 慟哭の押し寄せる海白鳥来
 諾々と生きて柚子湯を溢れしむ

泉 志眞子

薄れゆく面影やさしリラの冷え
 萩の雨ねずみ泣きする博多帯
 葉唐辛子愚痴の煮詰まる落とし蓋
 裸木やどこで落とした知恵袋

川守田美智子

落書の革命の詩月冴ゆる
 煩惱を投げ込む器冬の海
 人間を絡めとる畏山眠る
 風の夜のホットミルクと修司の詩

岡田 春人

どこまでも歩ける靴よ紅葉狩
 秋のをせ吟行のをせロープウェイ
 閩兵のごと山茶花の垣根かな
 干柿のこの甘さ祖母連れて来る

いを感じる楽しみな時間です。(興津 恭子)

・「山河」に所属しています。コロナ前は小岩の句会に参加しておりましたが、現在は山河誌の投句と近所の方々と月一回の句会を楽しんでおります。(新江 堯子)

・最近は今行に出られず、日常の中から、句を作ることが多く、足腰を鍛えなければと思っています。(河合 利枝)

・俳句を始めて八年目。「季寄せ」をもっと汚さない・・・。(大庭 芳郎)

・元旦の地震の時は娘と孫たちでゲーム中。大変びっくりしました。被災者の方々にお悔み、お見舞い申し上げます。(飯塚 宣子)

・昨年心臓の手術をして元氣になりました。また、俳句を勉強させて頂くことが出来て嬉しいです。感謝です。(川又 優)

・今年度末に教員生活を辞める予定でしたが、引き止められてもう一年だけ教壇に立つことに。新しい指導要領やICTの活用についていけません。時代は変わった。(東 國入)

・コロナ騒ぎが漸く下火に。私たちの俳句サークルも人数は減りましたが、今までのように月に一度楽しんでおります。(大地 節子)

・昨年暮れに姉、元日に従妹が亡くなり、私がかたくなければならず、大変な年末年始と成ってしまいました。(渡邊 竹庵)

・難聴が完治せず、今は諦めて補聴器をつけております。(尾形ゆきお)

・細野一敏さんの命日(一月十六日)を迎え悲しみを深くしています。最後のお手紙の「又勉強会やりたいなあ」の一文がたまらないです。(石井紀美子)

・読初は句友から借りた「橋本無道物語―妻よおまえはなぜこんなに可愛いんだろうね」とても面白かった。(池田 和人)

諸家近詠

金 蘭

げげん顔犬のまなざし猫じやらし
十二月八日寝起きの夢現
父となるヨセフ杖もつ聖夜劇
交差点ひねもす黄なる石路の花

加賀谷秀男

ひんがしに神童出でよ沙羅の花
果てしなき空の青さも灌仏会
葉桜に溶け込んで行く縄文人
炎天を遮ってくる男あり

上野 紫泉

マロングラッセほろと崩るる寒の入り
無きはづの妬心かすかに夜の百合
「あのねママ大好き」ぼつと冬日浴ぶ
大寒やピタミンこぼる吾子を抱く

興津 恭子

地球飢えるか古古米は寒禽へ
若き日へ歩幅揃えて夏帽子
遅れ毛に風空耳の祭笛
新涼の珈琲今日を組み立てる

新江 堯子

よく笑う嬰の鼻先風涼し
夕日海に崩れる音を聞きし夏
冬銀河秘密のひとつ投げてみる
お愛想の本音なに色冬早

和田 三枝

過去形できらきら喋る冬木の芽
冬薔薇と友達になる荷を解かれ
福耳に盛り沢山の風邪ぐすり
寒空へ水を祀りて水貰う

蛭名 節昌

冬構えしてより妻の座夫の座
冬の暮あまた鴉に進化の声
穏やかな海鼠の時を覗き込む
冬鴟や生還という目覚めあり

河合 利枝

花人となるを待みて義足寝る
海の日や学び直さな塩加減
柿落葉一瞬までも誇らしく
礼状に差し出し名なし師走来る

黒澤 雅代

普通の木に普通の鳥の来て日永
夏菜莢まつ赤昭和の時間を摘む
紙に裏おもて晩夏にうしろ髪
銀河濃しときどき神を身近かにす

大庭 芳郎

太宰忌はわが誕生日ああメロス
白に黒まじわる赤や昭和の日
農機具を手放すと決め零余子めし
寒芹の置かれし朝の無人駅

窪田 俊作

トマトのような夕焼を貨物船
バツハ聴く残暑新聞休刊日
なんとなくしぐれが来そう猫を抱く
いかのぼり天空に馬走らせる

飯塚 宣子

藤白し廊下は果てしなく暗い
病む夫がひとり将棋や桜餅
枯れきって昨日の色の唐辛子
滝落ちて垂直の風生まれけり

池田 幸

声変わり少しすごみの葱坊主
白産衣稚一筆の仏の目
足枷の互の宝雲の峰
「ちゃん」呼びに振り向き破顔帰り花

川又 優

元日や新幹線の止まる駅
冬晴や免許返納したばかり
日だまりや爺と遊びし子等帰る
湯けむりやばかりばかりと浮林檎

越野 雄治

秋行くや引出にある謎の螺子
秋灯を消しても地囃の海青し
バーボンのグラスに冬の霧流れ
観音の運命線視る寒さかな

荒木 洋子

凜凜と従者でありぬ冬桜
冬桜あなたが包む銃の音
会果てる傍らにある冬ざくら
水の綺羅日溜りの綺羅冬ざくら

金子 未完

人間が蝶々になれる試着室
蜘蛛の糸平和はいつも宙ぶらりん
青蜜柑未だ発展途上です
福笑い五臓六腑は非対称

稲葉 洋子

初詣心の扉開けに行く
ゆらゆらと八月の浮く現像液
夫婦とは素数の法則麦の秋
明日泣こう今は虫の音聴くだけに

東 國人

子鹿群るダウン症児の追いかける
ひらがなでしやべるAI重信忌
紅葉はら紅葉はらひら無言館
とんぼ死にて豆大福の売り切れる

倉岡 けい

咳ばらい一つクロッカスの集合
花冷えやこんな重いポールペン
湿原という無縫な大地夏兆す
万緑に押し上げられて天守閣

大地 節子

後戻りできぬ歳月冬の川
年逝くやいとしき日々を引き連れて
初霞秘境傘寿へいざ進め
子等の声シャープして春動き出す

渡邊 竹庵

同胞の弓手に数珠を師走の夜
「イマジン」は褪することなし去年今年
鈍色の地震の震へ雪しんしん
白抜きの赤い幟や節分会

なかもと淑子

去年より少し小さき揚羽くる
りんどう咲く幼な名の友に会う
焼き芋のぬくもりほどの吾が無上
雪うさぎ恋うふるさとの無かりけり

尾形ゆきお

晩夏地下鉄スマホ首なる杭の列
一茶忌の独りの椅子がギーと鳴る
柚子湯たて「個」と眩げば柚子が寄る
冬日向ブラットホームという疎林

小多田文字

どの子にも大志ありてや初御空
寿ぎて縁の糸や賀状来る
山道の陽を浴び尖る崖氷柱
談笑の女正月夜ふけまで

小野 裕文

この次は会えぬ気がして春惜しむ
何もせず流れ行く日々あめんぼう
晩秋の老いても伸びる爪を切る
ひまそうな猫と目が合う冬至の日

川島 里子

初明り恙なき日と絵馬に書く
炎天に白バラ投下八時十五分
雲の峰未知の不安も混り湧く
現世を去る気はしない銀杏散る

倉持 紀子

月蝕は熟れゆく果実冬の波
寒椿湯煎に香るチョコレート
知恵の輪のような古鍵寒の月
波退いて巻貝乾ききる寒暮

加藤 春草

梅一輪わが子のやうに洗車する
かき氷の小旗をしまふ波の音
すこしづつ秋の気配の裏通り
トンネルを出て白粉花に迎へられ

土肥 勲

完読の余韻と遊ぶ冬銀河
春暁やデラシネの青き旅立ち
卒寿にて逝去の報せ枯木星
初日の出戦禍の郷き波越へて

神作 仁子

靴底にガムが張りつく敗戦日
水澄むや序の舞のごと鷺歩む
蹲の日をひと柄杓竜の玉
大寒の黒の鎮もる樂茶碗

石井 稔

日暮なりわが波郷忌の静けさに
冬日向盲導犬のうすまぶた
霜の夜や標本箱の代理石
ラム肉にブラックペッパー冬月夜

石井紀美子

森の婚はじまる烏瓜の花
風船をひっぱっていく乳母車
送り仮名のようなやさしさ滴れり
新刊の俳句の森にいる夜長

栗山美津子

初盆の君にくゆらす珈琲香
午後六時君待つカフェのポインセチア
ラテアート色なき風も綾をなす
アネモネやネイルサロンを初予約

石井 浩美

仏壇を灯すぼんぼり大旦
死者六十名初日記閉ぢにけり
御降のあと啄める鳥かな
鼻や記憶つぎはく針ひとつ

池田 和人

立春やフーコー振り子けふも揺れ
岩石のプレパラートや虹立ちぬ
福田村事件ありし震災忌
極月や嗚呼はらからの骨拾ふ

私の感銘句

多胡たかし

作者名 号頁

追憶はひとりの時間小鳥くる 小多田文子 149 8
 木枯しがふと立ち止まるバンクシー 窪田 俊作 149 8
 蠟梅のたましい抜けてゆく香り 岡田 春人 149 9
 この街は古い写真のようで雪 鈴木 一行 149 9
 青柿や俳句とは捨て台詞なり 並木 邑人 150 3
 風紋や秋は小走り九十九里 福田志津子 150 3
 午後漁に出てゆく船や晩夏光 安井 三緒 151 6
 この街は古い写真のようで雪 鈴木 一行 151 6
 北陸あるいは東北地方の内陸の小さな街を想像、厳しさの中にしんとした静けさ、そして何とも言えない懐かしさ、もしかしてこのモノク口風景の街は作者の原点なのでしょう、止めの「雪」も印象的です。

吉岡 一三

一本の樫オリオンはまだ遠い 高橋 健文 149 8
 書き出しの泥濘にいる青鯨忌 並木 邑人 150 3
 天高し明日歩くため今日歩く 長濱 聰子 150 3
 凍土融けるまなモスが起き上がる 浪岡 玄 150 4
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋 木之下みゆき 150 4
 ひまわり迷路絶望的に晴れている 羽村美和子 151 4
 ふたりです空想老人の晩夏 山中 葛子 151 4
 松村 五月

仮の世の仮の嘘をして晩年 塩野谷 仁 148 3
 桃咲いて人が毀れる透きとおる 直江 裕子 149 9
 晩年の武具のひとつに秋薔薇 無 子 149 9
 雨だれの下に雨だれ藤の花 鈴木 一行 149 9

仏みな正面を向き夏開くる 中里 結 150 4
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋 木之下みゆき 150 4
 昭和の日昭和を削る乾物屋 矢野 忠男 151 4

松澤 伸佳

釣銭のきれいなお札一葉忌 里見 さち 148 2
 精神の渴きに触るる花石榴 黒澤 雅代 148 2
 冬晴れや切絵を抜ける馬の群 川守田美智子 148 3
 霜柱あれば踏みゆく通学路 多胡たかし 149 8
 背骨にある秋刀魚の矜持波の音 片岡伊つ美 149 8
 パスワード変へて氷の声を聴く 高橋 健文 149 8
 青春の前髪五ミリつめて夏 保坂 末子 150 3

千葉 信子

極月の水を見ていることが旅 塩野谷 仁 148 3
 象さんの大きなお尻冬日和 小川トシ子 148 4
 夏空に波のくづるる小湊線 岡崎 翠 148 5
 引力に乳房は任せ登高す 高木 一恵 149 9
 蔓薔薇の一枝添はさる家族かな 津高里永子 149 9
 まだ星になる気なくて星祭 宮本美津江 151 5
 草一本なし故里の墓参り 横須賀弘子 151 7
 草一本なし故里の墓参り 横須賀弘子 151 7
 さり気ない描写に作者の感性を感じる。久しぶりの故里、すでに両親は他界し、墓へ続く道も人の気配さえない。しかし、墓の周りは草一本もない。いろいろ報告するつもりだったが墓の厳しい視線に声が出ない。

池田 博臣

精神の渴きに触るる花石榴 黒澤 雅代 148 2
 転生の星座を描き山眠る 小野 功 148 2

夕ぐらし魂函いくつ開け放ち 清水 伶 148 3
 流木の精霊ならん鷹柱 椎名 鳳人 148 3
 脱皮後の少女はさくら吹雪かな 小林 実 148 3
 月光の梯子を降ろせ国境 羽村美和子 151 4
 それぞれに手もちの時間秋果籠 森井美恵子 151 4
 脱皮後の少女はさくら吹雪かな 小林 実 151 4

椎名 鳳人

天空に届く千葉城春の文字 長井 寛 149 10
 房総の臍のあたりの寝待月 高橋 健文 149 10
 地虫出づ磁場逆転の地層から 野口 久 150 5
 野馬土手をとほとほ歩く文化の日 木之下みゆき 150 5
 深秋の溪谷幽しチパニアン 実籾 繁 151 6
 花げんげん上総馬立駅に人 山中 葛子 151 6
 天高し関東平野に閑宿城 三上 啓 151 6
 天高し関東平野に閑宿城 三上 啓 151 6
 往時の閑宿城の遺跡はほとんど残っていない。現在のものは平成七年、天守閣を供えた閑宿城博物館として設立されたものである。関東平野のど真ん中に聳え立つ雄姿は見るものを魅了する。秋天の響きが聞こえて来そうだ。

鈴木まんぼう

地底から息抜きに出て曼珠沙華 國分 三徳 148 2
 水馬円周率を抜け出せず 長井 寛 149 8
 寒波来る遠近法でやってくる 徳吉洋二郎 149 8

青柿や俳句とは捨て台詞なり 並木 邑人 150 3
 十年日記父の無念に風入れる 長濱 聰子 150 3
 木犀の星一つ付け猫帰る 森井美恵子 151 4
 花げんげん上総馬立駅に人 山中 葛子 151 6

山崎 幸子

ウオツカの壘の形に冬来る 越野 雄治 148 3
 こうこうと山動かして木の芽吹く 長井 寛 149 8
 一本の權オリオンはまだ遠い 高橋 健文 149 8
 ウポポイは歌うことなり星の橋 並木 邑人 150 3
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋 木之下みゆき 150 4
 裂け石榴人に自白の慣いあり 実籾 繁 151 4
 火のように夕日いろ濃き原爆忌 山中 頼子 151 5
 塔持たぬ遊牧の民雲素秋 木之下みゆき

この作品に目が止り私の旅は春のモンゴルで
 相撲など見て草原を車で移動。草原での目印は
 と聞くと遠くの見慣れた山との事。塔を持たな
 くて良い。小川の傍らでゲルを張り、羊のごち
 走で食事。自然の懐に居ると感じました。

中嶋 三雄

憲法記念日卵黄くずれないように 小川トシ子 148 4
 背骨にある秋刀魚の矜持波の音 片岡伊つ美 149 8
 薔薇高く咲かせ現状維持願ふ 津高里永子 149 9
 離陸機へ案山子背伸ばす三里塚 中村 博子 150 5
 房総の海を枕に山眠る 樋口 博徳 150 5
 放課後の大きな落葉補欠捕手 吉岡 一三 151 5
 天高し関東平野に閑宿城 三上 啓 151 6
 天高し関東平野に閑宿城 三上 啓

関東平野は日本最広の平原である。閑宿は埼

玉・茨城両県に隣接し、群馬県にも近い。イメー
 ジとしても関東の中心である。秋高の空のもと、
 家並はなべて低く、閑宿城の復興天守がやや高
 く背伸びしている。

國分 三徳

抜かれし歯のみじめたらしく年の暮 近藤 栄治 148 3
 三度目も痩せ秋刀魚にて終りけり 越野 雄治 148 3
 寄鍋の煮詰まるころは泣き上戸 小野 裕文 148 4
 身に入むや五臓六腑に灯をともし 細根 栗 151 4
 梅雨晴間雄節雌節の枯れぐあひ 安井 三緒 151 4
 初夢や上段の間へ誘われ 松澤 伸佳 151 4
 スタジアムに蜻蛉一匹生きる場所 森井美恵子 151 4
 寄鍋の煮詰まるころは泣き上戸 小野 裕文

酒の場は笑い声に溢れるのだが、珍しいこと
 に、泣き上戸の人が確かにいる。何か悲しい気
 分になるらしく、鍋が煮詰まり、場が出来上が
 る頃に、独りめそめそしているのだ。それを面
 白がって一句に仕立てた。うまい。

小野 功

茶の花や何処へも行かず誰も来ず 佐々木幸子 148 2
 タビぐらし魂函いくつ開け放ち 清水 伶 148 3
 寒波来る遠近法でやってくる 徳吉洋二郎 149 8
 推し測る己が認知度臙の夜 野口 久 150 3
 八十の真つ只中の落し文 星野 一恵 150 4
 露寒や声なき声の無言館 山中 頼子 151 5
 成田発成層圏行きおにやんま 吉岡 一三 151 6

小林 実

霜柱踏む五億年の記憶の音 白木 暢子 148 4

さくらんぼ揺れているのは地球です 徳吉洋二郎 149 8
 青嵐四股踏むように嬰歩く 菅ノ谷文子 149 9
 古代蓮骨透けるまで見つめおり 下村 洋子 149 10
 ひまわり迷路絶望的に晴れている 羽村美和子 151 4
 まだ星になる気なくて星祭 宮本美津江 151 5
 房総に駱駝がふたつ臙かな 松村 五月 151 6
 さくらんぼ揺れているのは地球です 徳吉洋二郎
 句意鮮明、私のような馬鹿でも世界中で自然
 災害、戦争、あゝ

大見 充子

はるかとは父いる午後の漆の実 清水 伶 148 3
 訳もなく泣ける嬉しさ星月夜 下村 洋子 149 8
 一本の權オリオンはまだ遠い 高橋 健文 149 8
 十年日記父の無念に風入れる 長濱 聰子 150 3
 われもまた可燃性なり樫紅葉 浪岡 玄 150 4
 月見草死にたくなくて死の話 馬淵 津枝 151 4
 与うべき何もなければど夏の月 山崎 聰 151 5
 一本の權オリオンはまだ遠い 高橋 健文
 小さな自分と壮大な未来。頑張っている作者
 が見える。身につまされる一句。

岡田 春人

秋うらら娘のやうな嫁とある 岡崎 翠 148 2
 敗戦日這ひつくばつて畳拭く 神作 仁子 148 4
 五回目のワクチン接種冬の陣 小多田文子 149 8
 青嵐四股踏むように嬰歩く 菅ノ谷文子 149 9
 日向ほこ天国ですねお前さん 馬場 馬子 150 3
 冬近し両手につなぐ子の温み 宮下 奈緒 151 4
 秋風や山頂で売る恋みくじ 増田 元子 151 5

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第三七四回 (令和五年十一月十四日)

司会 並木 邑人

何処その狐尻尾出したりしまつたり
文化の日卵サンド買いに行く
一人いて木の実の独樂の回る音
指笛はイエスカ山巔羊雲
一葉落ち蛤御門開きけり
櫛の実地球はロシアブルーレット
辻褄を拒むしんどさ松手入
霧を吐く反面教師の父が来る
三十三才郵便局のお引つ越し
蔓もどき黄赤こぼしてわたくしつなく
カープミラー曲がりきれない秋がある
人忘れ人を待つ霜月の夜
釣道具ゆくりと調べ冬隣る

鈴木 瑩子
村上 澄子
なかもと 淑子
高木 一恵
徳吉洋二郎
池田 博臣
並木 邑人
小林 実
増田 豊子
栗原 正子
星野 一恵
白木 暢子
股野 久子

池田 博臣
横山 郁子
栗原 正子
長井 寛
長濱 聰子
加賀谷秀男
徳吉洋二郎
石井紀美子
越野 雄治

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館)

第一四八回 (令和五年十二月二十八日)

通信句会 担当 森井美恵子

田作りや眼一つに海ひとつ
空也忌の切つ先走る童かな
あれは空事街燃えて凍つ心
天網の遙か上空六連星
イヨマンテ目に星空を持つ熊よ
遠い空母たくましき干菜汁
寒暁や北の空から飛翔体
空っぽの抽出し胸中は雪野
雪しづか魚の煮付けを拵る夜は

池田 博臣
横山 郁子
栗原 正子
長井 寛
長濱 聰子
加賀谷秀男
徳吉洋二郎
石井紀美子
越野 雄治

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

第一三四回 (令和五年十二月九日)

司会 長井 寛

極月の空つぼとなる白ワイン
蓮根掘る空より幼き日々視える
この空のつづきに戦火ある師走
千支飾り首振りしままカオスの世

山崎 幸子
並木 邑人
鈴木まんぼう
森井美恵子

地の固さ空の青さや冬桜
金賞の黄菊もつとも疲れをり
銀杏落葉切れ目重ねて遊ぶ午后
蠟月の象は薄目で空を見る
柿食へばインバウンドの鐘 in 京都
木霊の象徴として銀杏散る
冬至蒟蒻蕉翁の旅まだ続く
風のデッサン冬青空こくるみの木
雪になる真白き声を聴いており

高橋 宗史
岡田 春人
佐藤 鈴子
下村 洋子
藤好 良
椎名 鳳人
木之下みゆき
山口 明
長井 寛

ぼろ市ならあるクレオパトラの涙壺
冬ざれや倫理の底が抜けていく
これはこれは晩年の顔福笑い
遠い日の姉妹八人福笑い
はみ出しているほうれい線福笑い
本音出たおでんの汁の煮詰まりり
円盤の「運命」に針大旦
この星にイマジン流れくる聖夜

越野 雄治
鈴木 美幸
田沼美智子
村田 満枝
加藤 法子
前田 孝子
長濱 聰子
泉 志眞子

君津研究句会報告

(於：君津市生涯学習交流センター)

第四十五回 (令和六年一月十一日)

司会 徳吉洋二郎

生き方の読点として福笑
結局笑い上戸に染まる福笑い
初日の出神よ仏よピンコロよ
定住の一茶とあそぶ初すずめ
少年に檸檬一個の恋心
ゼレンスキーもプーチンも居て福笑
古民家の杉葉焚く音冬夕焼
福笑い余韻を残し子等帰る
山茶花よ道の正しさは「楽しい」か
お婆笑む小皺育む福笑い
氏神に新蕪供ふ身土不二

並木 邑人
馬淵 津枝
古賀 壽昭
長井 寛
石井紀美子
徳吉洋二郎
小澤 富子
森 孝子
佐藤 鮎美
羽矢 眞人
山田たかし

強化部より

☆いすみ・安房地方に研究句会を！

現在、千葉県現代俳句協会には、津田沼・青葉・柏・君津と四つの研究句会があり、活発に活動しています。房総半島の太平洋側にもあつたらと、強化部の高橋(宗)、東が語らい、昨年十月末から、並木会長の指示を受けて始動。春先の立ち上げ実現化を目指し、取り組んでおります。

☆俳句大会高校生の部

本年度は八一〇名(昨年は六九九名)の高校生の皆さんから応募がありました。三月一日の最終選考で入賞者が確定します。(高橋宗史記)

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

青年部の活動内容は随時SNSのアンケートやメッセージのやり取りで決定、運営しています。フラットで居心地の良い部内です。夏雲システムによるインターネット句会を隔月実施。(次回は三月)年二回リアル吟行会実施。(次回は五月)参加希望の方はご連絡下さい。六十歳以上の方は青年部準会員となります。連絡先はこちら。

Kokomiya2003@yahoo.co.jp (青年部・三宅)

第四回あしたば句会(二月開催一人二句抜粋)

遠火事や小指で触るる片ピアス 石井 稔
朝市の街丹頂の声一つ 陸野 良美
さよならの遠因となる牡蠣フライ 松本 千花
百均で口紅を買う雪女郎 徳吉洋二郎
鶏日の地震人道を揺り起こす 並木 邑人
初日の出沖に地震のまだ眠る 東 國人
年始酒長生きせむかやめやうか 無 子
竜の玉自賛の語尾が裏返る 羽村美和子
蟬氷一か八かの歩み出し 遠藤 寛子
冬の夜ヘッドライトは蜜の色 三宅たくみ
近づく肩のありふれた夜の余寒 森井美恵子
自転車の車輪くるくる寒の入 石井 浩美
今回は兼題「氷」「遠」に挑戦しました。
個性的な句が並び、句評からは新たな発見が生まれ、互いに刺激を受け、大いに盛り上がりました。
(遠藤寛子記)

初心者講座 第七回〜十回

さざなみが別れを告げる春の池 宮原 青佳
都鳥紅色を持ち曇天へ 萱原 泰子
群れ咲くも野水仙わたしはわたし 栗原 正子
寒桜一枝だけに光あり 山崎 幸子
機関車の影を濃い目に呑立つ日 矢野 忠男
三百年色変えぬ松の戦略 荻野由美子

講座の最終回は、千葉公園での吟行会。早くも寒緋桜が咲き、吟行は初めての方を温かく迎えてくれました。一年間を振り返り、成長と熱意を確認した日ともなりました。次年度は新しい仲間をお迎えして、一緒に楽しみたいと皆張り切っています。(羽村美和子記)

初心者講座 第二期生募集!

日時・令和六年四月より全十回
第三土曜日十三時より
場所・千葉市民会館
申込先・羽村美和子
roseta.miyako@yahoo.co.jp
〇四三一二五六一六五八四

◆春の吟行会のお知らせ

場所 千葉市動物公園
日時 令和六年四月二十一日(日)
句会場 千葉市民会館 十三時二十分より受付
瞩目二句(投句締切十三時五十分)
*詳しくは同封のチラシをご覧ください。

第一回幹事会の決定事項について

- 総会・俳句大会について
来年度より、総会及び俳句大会を分離して開催する。開催は午後の半日を想定。
三月の総会は、議案の審議を中心に、一句句会等を行う。会場は千葉市民会館を想定。
- 創立四十五周年記念俳句大会開催について
来年は創立四十五周年を迎えることから、秋の俳句大会を記念大会とする。来年度の総会では、役員改選を予定している中で、早期に体制を整えるべく、今年度五月の幹事会に於いて実行委員会を立ち上げる。
- 会報「現代俳句千葉」経費縮減について
昨今の物価高騰に基づき、当協会でも会報発行費、及び送料などにつき、経費の縮減を図るため、左記に縮小、変更。
・「諸家近詠」
従来の一入五句より一入四句に。
今号は対象者に個別に依頼文を郵送済。
次号より対象者には会報と同封の予定。
- 「私の感銘句」
従来の一入十句より一入七句に。
依頼文のちらしは一五一号(昨年12・1発行)の会報に同封済み。
一句鑑賞文も最大一〇〇文字までとする。
・研究句会報は、今号より、各会、ひと月ごとの掲載とする。

以上

図書紹介

■ 句集 『白熱灯』 東 國人

令和六年二月十四日刊 コールサクク社
かぶりつく枇杷の実夜の白熱灯
憲法記念日山椒魚は動かない
安房相模つなぎし海の大西日

千葉俳句作家協会

第9回千葉県俳句大賞

・大賞 『素描』 清水 伶

深爪の男あつまる桃の花
鶏頭を素描にすれば荒野なり
夕ひぐらし魂函いくつ開け放ち

・奨励賞 『母情』 椎名 鳳人

我が死角正面にあり初鏡
失くしたる指の先まであたたかし
全景が浄土郷なり蟬時雨

総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせの通り

三月十七日(日)に定期総会・俳句大会が千葉市文化センターにおいて開催されます。

定期総会 十時半開会

俳句大会 十三時開催(席題発表は十時)

是非ご参加下さい。

掲示板

《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 玉山政美

● 退会 (会員)

阿部さくら、鈴木郁子
富澤ムツ子、半田千枝
平木千恵子、宮野遊子
門谷杜人、小泉瀬衣子
田端重彦、辻本喜代志
内藤富雪、樋口博徳
三浦澄子、三好美穂子

● 新会員・会友

煙 陽 (会員) 大石雄鬼 紹介
鈴木卯ノ花 (会員) 東 國人 紹介
座間 等 (会員) 江中真弓 紹介
置鮎 隆一 (会友) 並木邑人 紹介
天野 清昭 (会友) 並木邑人 紹介
阿部さくら (会友) 高橋宗史 紹介

● 移転 (会員)

松本悦子 (東京都区より)
宮原青佳 (中北海道へ)

《令和六年度第一回幹事会》

日時 令和六年一月二十三日(火)午後一時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、令和六年度総会資料について
- 二、令和六年度俳句大会について
- 三、令和六年度春の吟行会について
- 四、青年部活動について
- 五、会報一五二号について

六、初心者講座について

七、(社) 現代俳句協会の動向について

八、千葉県現代俳句協会
創立四十五周年記念大会について

九、各研究句会の状況について

十、その他

① 会員・会友動静

② 次回幹事会 令和六年五月二十一日(火)の予定

③ その他

事務局・編集部だより

● 経費縮減の折、今号より少し縮小した会報になりました。「私の感銘句」は従来通り年四回に分け掲載、「諸家近詠」のご近況は、三行程度に割愛することもございますので、なにとぞご理解頂きますようお願いいたします。

現代俳句千葉 第一五二号

令和六年三月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田

六七七-11A二二五

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒277-0084 柏市新柏二一三三六

岡田 春人

TEL・FAX 〇四一七六一一六三九